

Sundown and hightide

- ・ 燭台切光忠×へし切長谷部の現パロ小説です。
- ・ 実在する地名や施設名が出てきますが、実際の情報を反映したものではありません。
- ・ Dom/Sub ユニバースの設定に独自の設定を追加しています。
- ・ 性描写を含みます。

制服のボタンが弾け飛んで、暴いた肌の生々しさに、この恋のバッドエンドを見た。

家族も、友達も、恋人も永遠でないというなら、そのどれにも当てはまらない君だけは、僕のそばから離れないものと勝手に、そう勝手に思い込んでいた。

君は一人の人間であり、ゆえに自由であり、全てを自分の意志で決めていい。いつだったかな、そんな分かり切ったありきたりな言葉を並べて、すぐ卑屈になりたがる君を慰めようとしたこともあった。けれど蓋を開けたらこんなものさ。僕は君と出会った瞬間からずっと、君が僕の所有物だと、そうであることが自然で、それに反するような自由や意志なら存在してはならないと、恐るべき傲慢さで頑なにそう信じていたんだ。

「馬鹿だな、長谷部くんは…どうして、セーフワードを呼ばなかったんだい…?」

濡れて額に貼り付いた煤色の髪を拭ってやると、すっかり疲れ果てたのか、いつも彼が眠るとき眉間に刻んでいる深いシワもつるんと見えなくなっていて、子供のようなあどけない寝顔が、ここに初めて来た日のことを僕に想い起こさせた。

*
*
*

小学六年になったばかりの春だった。父の使用人の一人が僕の部屋にやって来て、明朝引越しをするから支度をするようにと僕に告げ、次々と段ボールの束を運び入れると、それをその場に置いて出て行った。父は何と言っているんだと尋ねたら、「できそこないの Dome」とのことだった。

その当時、段ボールを箱に組み立てることすら初めての経験だった僕だが、それでも自分の置かれた境遇はおおむね正しく理解していた。自分の服、靴、本、文房具、なんか売ったら高そうないンテリア、シャワーブースに備え付けのシャンプーに至るまで、この先の自分に降りかかるであろう環境の変化に少しでも役立ちそうだと思ふものは遠慮なく箱に詰めた。子供には持て余すほど広い部屋であったから、一人で作業するのはとても骨が折れた。最後に特別お気に入りの小説と服と眼帯のスペアだけを詰めた旅行カバンを閉めたときには、窓から射し込む朝日が空っぽの部屋を遮るものなく照らしていた。

意地汚く家財を持ち出そうとする僕に対して嫌みの一つくらいはあるだろうと思つたが、出発の朝、父も母も玄関にすら現れなかった。毎日小学校への送り迎えをしてくれた運転手の男だけは車中で僕に気遣わしげな言葉をかけてくれたが、空港に着いてからは運転手とも別れ、引率役の使用人が歩いて行く方向について行くだけで、僕は何一つ質問せず黙って飛行機に乗り、荷造りで徹夜明けだったのでついうとうと微睡んでいる間に、岡山空港に着いていた。社会科の授業で白地図に書いて覚えたから岡山がどこかは知っていた。来るのは初めてだった。

そこからまた車に乗せられ、見たことのない町並みを眺めながらしばらく移動した。今日は朝から乗

り物に乗ってばかりだ、と疲れが出たので少しいらした気持ちになりながら、外の風景を手がかりに自分が今どこにいるのか知りたくて目を凝らしていた。岡山県瀬戸内市長船町……と電柱の番地を読んでいたとき、車が白い建物の前で停まった。目的地に着いた様子だった。

背が低くて横に平べったい、幼稚園みたいな建物だった。門に石の表札が埋め込まれていて、「長船愛児園」と書かれていた。長船というのは先ほど見た地名だろうし、児は子供のことだからやっぱり幼稚園かもしれないと思った。そのときの僕は、いわゆる養護施設というものの存在を知らなかった。外国の小説にときどき出てくる「孤児院」なら知っていたが、それは親が死んでしまった子供の行く場所だと思っていた。

目の前であれよあれよという間に手続き的なことが済まされ、そのどれもが自分に関わることのように見えるのに、僕のサインを求められる場面は一度もなかった。園長を名乗る女性から「今日からは私と同じ苗字を名乗りなさい」と言われ手渡された名刺には、表札で見た「長船」の名が印字されていた。それから園長は僕を施設内の一室に案内し、ここが今日からあなたの部屋です、とだけ説明すると、まだ手続きがあるからと言って出て行ってしまった。僕の部屋と言われても、どう見ても誰か別の子供にあてがわれていた様子で家具もそのままになっている。居心地の悪い思いをしながら、その部屋の窓から自分が今しがた乗ってきた車が走り去って行くのを見て、そこで初めて僕は、ここがやはり孤児院で、孤児院とは親を「失った」子供の行く場所だったのだと学んだ。

それにしても狭い部屋だ。他の人間の私物が置きっぱなしだし、壁紙は黄ばんで所々剥がれているし、さつきから少し動く度に木の床がぎしぎし音を立てる。誰かの勉強机とセットで椅子も放置されていたが、座る気になれずしばらくその場に立ち尽くしていた。

不意に外からドアが開かれ、僕の通っていた学校の中等部の人が着ていた制服によく似た詰襟服姿の青年がずかずかと室内に入ってきた。実際、このあたりの学校の中学生なのだろう。僕より背が高く、年上には見えたが、大人と言うには若かった。

「…おい、おまえの荷物が明日五十箱届くと聞いたが、何かの間違いだよな？」

彼が最初に発した言葉は、自分の名前でも僕の素性を尋ねるのでもなく、僕とは時間差で運び込まれる予定の荷物に関することだった。良かった、追いつく子供の荷物でも律儀に発送してくれたようだ。

「五十だって？三つ少ないな。五十三箱と言っていないかったかい？」

「…正気か？」

「問題ないよ。狭くて驚いたけど、想像していた状況よりは屋根があるだけマシさ。ここにある誰かの荷物を片づけてもらえれば、置けないこともないだろう。どのみち、その箱のほとんどは処分してしまうつもりなんだ」

「何だそれ。わざわざ東京から俺の部屋にゴミを運んで来てくれたのか？」

「いや、僕の心情的にはゴミだけど、市場的にはゴミじゃない……『君の部屋』？」

「ここは僕の部屋じゃないの、と尋ねた僕を呆れた表情で見下ろして、「俺とおまえの部屋になったんだ」と彼は言い直した。」

「俺は長谷部国重。中三だ。今日からおまえのルームメイトになる」

「ルームメイト……この部屋を二人で使うの？」

「そう言ってるだろ。頭悪いのか？ DoⅢの癖に」

「……」

僕が押し黙ると、彼はしまったという顔をして目線を外し数秒うなだれてから顔を上げ、別に頼んだわけじゃないのに、自分も僕と似た境遇でこの施設に入れられたこと、自分は重度の sup であることを、これでおあいこだと言いたかったのか、気まずそうに明かした。

「僕は、しよ……おさふね、光忠」

「ああ、園長の養子に入ったんだ。さっき廊下で園長から聞いた」

「長谷部……さんは」

「敬語はなしだ。小学生にずっと敬語使わせてたら、他の奴から舍弟にしていると誤解される」

「じゃあ、長谷部くん。……君は sup のハイ・ユニバースなのに、DoⅢの僕と同室になって大丈夫なの？」

ふんと小馬鹿にするような表情で彼は僕を見降ろし、コードレスタイプの掃除機を僕の手押し付けると、話は手を動かしながらにしよう、と言って自分は勉強机を動かし始めた。

「……俺は、Domになりたんだ。園長からおまえの話が聞かされて、おまえには悪いがチャンスだと思つたよ。近くで Domを観察できて、グレアで操られる心配もない。ルームメイトには、俺が自分から志願したんだ」

グレアが使えないのつてやっぱりその怪我が関係してるのか？と彼は尋ねて、僕の右目を覆っている白いガーゼの眼帯を指さした。

* * *

この国には、男女の性別に加えて、社会的に認知されている「もう一つの性別（ユニバース）」を持つ者が一定数存在する。

それが Dom、Sub、Switch だ。

Domは生来の支配者の性。パートナーの Subからの信頼と服従を渴望する。その渴望は相手が SF でなければ、例えば Sub以外の相手、同じ Domやユニバースを持たない相手をパートナーに選んでも決して満たされることはない。

Subは生来の服従者の性。パートナーの Domからの承認と支配を渴望する。その渴望も Dom同様、相手が Domでなければ満たされることはない。

Switch (スイッチ) 稀にいる Dom と Sub 両方の性質を持ち合わせた性別で、報告例が少なく、また Dom でも Sub でもないという意味ではユニバーズを持たない常人と変わらないのではないかという学説もある。

いずれの場合も、ユニバーズを持つ人間は共通して卓越した知能や身体能力を備えているという特徴があり、代々そうだった遺伝子を意図して取り込んできた有力者の家系に生まれることが多い。科学的な検査である程度判別が可能なため、ユニ持ちと俗称される彼らは、しばしばその遺伝子を求める家に養子として迎え入れられる。すると当然、ユニ持ちを生んでそういう家に高値で売りつけようとする親も後を絶たず、人身売買の犯罪増加という社会問題に発展していた。

では、なぜ僕と彼はユニ持ちでありながら家族から見放されてしまったのか？それは、幼少期の科学検査で分かるのはその子がユニ持ちかどうかという点だけであるのに対し、実際に求められているユニバーズは Dom のみであり、Sub はその性質のデメリットを考えると常人にも劣る存在だと世間から認識されているからだ。

どれほど優秀な能力を持っていても、ユニバーズには欲求を解消させるパートナーが必要不可欠であり、欲求を解消できないと情緒不安定になったり体調を崩し短命に終わってしまう。Dom の場合は適当な Sub のパートナーをあてがっておけば一時的に欲求が満たされ落ち着くのだが、Sub に同じことをすると Dom に服従し何でも言うことを聞いてしまうため、Sub の人間に会社や家名を任せることにはどうしてもリスクがつきまとい、欲求不満から来る禁断症状が顕著に表出する、いわゆる「重度の」ユニバーズ

(ハイ・ユニバース)のために、症状を抑える薬も開発されているし、Subが性別を理由に仕事や相続において不利な状況に立たされるのは差別だと訴える抗議活動も盛んに行われているもの、Domが本気を出せばグレアという眼光ひとつでSubを黙らせてしまうことができる。これはDomとSubの本能であり、変えようのない事実だった。

* * *

「とはいえ、Subの俺と違って、腐ってもDomなのにな。グレアが使えないくらいで孤児院送りなんて、光忠の家は随分厳しいんだな」

「腐ってもって言い方も大概じゃないのかな…?思うに僕は、あの家の人達が求めていた『完璧なDom』じゃなかったんだ。あの家には僕以外にも外から集められたユニバースの子供が沢山いたよ。小学六年生になると何人かいなくなって、いなくなった数だけまた補充された。小六までにクリアしなきゃならない条件があつて、僕はそれに落第したんだ。だから僕は、『落ちこぼれのDom』なんだよ」

『平和な戦争』みたいな表現だな」

長谷部くんは苦笑しながらそう言ってベッドの端に腰掛けると、シーツをぼんと叩いて、僕にも座るように促した。

僕は互いに簡単な自己紹介を済ませた後、二人で部屋を掃除した。僕は二日連続で荷物を持ち上げたり運んだりすることになってかなりうんざりしていたのだが、ここはもともと長谷部くんの一人部屋で、そこに僕が入ることになったから一人分のスペースを空けなければならぬ。明日には大量の荷物が届くようだし？とトゲを含んだ口調で言われてしまうと、手伝うほかなかった。

出会ったばかりで気の利いた話題も見つからず、黙々と作業をしていたら、彼の方から「おまえが来ると聞かされたのが今朝のことだったから、掃除している余裕がなかったんだ」と言葉を投げしてきた。「僕も自分が家を出ていくと聞かされたのは昨日のことだったよ」と言ったら、呆れた顔をして、それから「とんでもねえな」と一言つぶやいた。

僕はその言い回しがなんだかすごく気に入って、もっと彼にそれを言わせたくなくて、今朝出て来たばかりの自分の家の話を次々にした。使用人にこっそりつけていたアダ名や、彼らにそれぞれ点数を割り振っておもちゃのレーザー銃で撃っていたこと、「家庭教師のオニババアを撃つと百万点」と言ったら彼は噴き出して笑った。

屋敷で飼われていた番犬のことも、小等部の飼育小屋にいたウサギのことも、そんなふうには思ったことがなかったのに、そのとき僕は三学年も年上の彼のことを「可愛い」と思った。そして、もっと可愛がりたい、とも。

隣に座ったら、二人分の重みでベッドのスプリングが波打つように軋んだ。こんな固いベッドもあるんだ、と勿論口には出さずに感心していたら、何を考えているか大体分かるぞ、とにやけ面で僕を見下ろして、僕の髪をくしゃくしゃと撫で回した。

「おまえ、本当にいいところの坊ちゃんなんだな。掃除機の使い方も雑巾の絞り方も知らないなんて、小学校で掃除の時間はなかったのか？」

「掃除は、掃除のおばさんがやるものでしょ」

「掃除のおばさんは撃つと何点？」

「五十点。優しい人は撃つても点が低いんだ」

僕ばかりじゃなくて、長谷部くんのことも話してよ。そう言うと、面白い話はないよ、と話をそらし、彼は背中から後ろに倒れ込んだ。今度は僕が見下ろす目線になったので、彼が天井を見上げているのを見事に、その端正な顔立ちを穴のあくほど見つめた。長いまつげ、つんと尖った鼻、薄くて小さな唇からため息が洩れると、おなかの周りがむずむずした。そういえば、昨日の夕食を最後に何も食べていない。そのせいか。

「なんか：長谷部くんを見てたら、お腹がすくみたい」

「なんだそれ。食い物じゃねえぞ。もうちよっとしたら作るから、待ってろよ」

「長谷部くんが食事を作ってるの？」

「今は俺だけだな。ちょっと前までは俺より年上の人がいたから、その人と俺とで作ってた。その人が高校を卒業してここを出たから、今は俺一人で作ってるよ。下の奴らがもう少し大きくなったら教えて手伝ってもらうけどな」

「僕も手伝おうか？」

「……おまえが？」

料理なんてしたことないだろう？と含み笑いで僕の方を見た。彼に下から見上げられると、今度は胸の周りがじわりと熱くなった。思わず胸を押さえて俯くと、光忠？と少し慌てた感じで名前を呼ばれた。

「大丈夫：だけど、なんか、君といると身体が変になるみたい。長谷部くんがSSMだからかな」

自分が言うのは良くても、僕にSSMと呼ばれると、長谷部くんはむうとしかめっ面になる。

「俺は何ともないぞ。でも：そうだな、俺にはDOMの症状は分からないから、今日からルームメイトになるにあたって、一応セーフワードを決めておこうか」

「セーフワード？」

「教えられてないか？DOMとSubが共同生活をやる際に、DOMがSubの望まぬ行為を強制しようとしたら中断させる目的で予め決めておく約束の言葉だよ」

「セーフワードが何かは知ってる。でもそれって、恋人とか夫婦とか、パートナー間で決めることじゃなかったっけ？」

「大体そうだけど、それだけじゃない。本来は、第三者が介入できない状況下で共同生活をする Dom と SDF の間で決めておくよう推奨されていることなんだ。途中で止めに入れる第三者のいない状態で空間を共有する関係…恋人、夫婦、それ以外にもあるだろう、兄弟とか、親子…、ルームメイトとかさ」

今日ここに連れて来られていきなりお仕着せられたルームメイトという関係が、そのときの彼の説明によって悪くないものに思えた。恋人や夫婦や兄弟とある意味で同列に並んでいながら、それらにはないドライな感じがある。秘密めいていて、カッコイイと思った。

「…いいね、悪くない。どういう言葉を選ぶべきなの？」

「そうだな…おまえが、我に返れる言葉がいいんだ。言われたら、すうっと冷めるような言葉」

「じゃあ一択だ。『燭台切』にして」

「え？」

「燭台切。僕の本当の苗字。…だったけど、もう僕には名乗ることさえ許してもらえないみたいだから、大嫌いな名前になったんだ。万が一僕がおかしくなっても、その名前で呼ばれたらすぐに我に返れそうだからさ」

「そうか…いや、というか燭台切っておまえ、いいところの坊ちゃんってレベルじゃないぞ」

財閥じゃねえか、とえらく時代錯誤な言葉を彼は使った。

「やだなあ、財閥なんて大昔に解体されちゃってもう無いよ。ちょっと誰でも知ってる企業グループの

名前を言うだけさ。覚えやすいだろ？」

「まあな……じゃあ、そうしようか。おまえこそ忘れるなよ」

「忘れないよ。もし僕が長谷部くんのいやがることをしたら、そのときはすぐに呼んでね」

自分からセーフワードを決めようと言ったくせに、僕に sub 扱いされると決まって拗ねる彼は、このときも僕を小馬鹿にするように鼻で笑って、「小六のおまえが中三の俺をどうこうできるわけないだろ」と言って右手を僕の顔前に上げてひらひらと振って見せた。

「たかが三つの差じゃないか。子供扱いしないでよ」

ついむっとして、その手を掴んで睨んだら、彼のまぶただけがぴくんと震えたので、また胸のあたりが熱くなり、まるで誰かに心臓を握られているように締め付けられる。やっぱり僕は、この人といると身体がおかしくなってしまうみたいだ。

「……子供がこんなに難しい言葉をべらべら喋れるかよ。おまえが『市場的にはゴミじゃない』とか言い出した時点で、ああユニバースなんだなって思って、対等のつもりで話してるさ。俺が言ってる『どうこう』っていうのは、そういう意味じゃない」

「長谷部くんは、どういう意味で言ったの？」

「さあ。自分で考えろよ。そーいや思い出したけど、明日届く荷物ってのは、『市場的に』売ったら金になりそうなものを持ち出したってとこか？」

「そうだよ。荷造りをさせてくれるってことは、少なくともその荷物を運び入れる場所を用意してくれているってことだと思っただけど、その場所に僕自身がいつまで居られるのか保障がないから、お金に換えられるものは一つでも多く持っておきたかったんだ」

「どうやって？」

「え？」

「何が届くんだか知らないが、どうやって金に換えるつもりだったんだ？」

「どうやってって…質屋に入れたり…」

「未成年」

「ネットオークションとか…」

「高校生未満」

「……………」

掴んでいた彼の手をぼっと放し、気まぐずく頭を下げた僕を見て、彼は最初こそ控えめに、途中からは遠慮なく大笑いしてベッドの上を転がって、僕の太腿におでこがぶつかったところで、ふふふ…と余韻を楽しむように震えた。

「……………笑いすぎ」

「だっておまえ、そんなにかっこつけた喋り方するくせに、変なとこ小学生だなんて」

「やっばり、そういう意味で子供扱いしてるじゃないか」

「悪い、悪い。…安心したのもあって笑いすぎた。とりあえず、明日荷ほどきして入りきらないものは倉庫があるからそこへ運ぼうぜ。園長が一人ひとりの銀行口座を作ってくれるから、光忠が高校生になってから売ればいい」

「高校…あと四年も先かあ」

「早く手放したいなら、俺が来年高校に上がったらオークションのアカウント作って貸してやるよ。キヤッシュカードも渡すから、俺の口座に入った売上をおまえの口座に移したらいい」

「……………」

「どうした？」

「…信用しすぎじゃない？僕のこと。初対面だよ？」

「そうか？…それもそうだな」

「なんか心配になる人だなあ」

僕の脚にくっついてほんやりとしている彼の髪に触れようとしたら、ふいと避けられた。ベッドから立ち上がった彼が「そろそろ夕食を作ろう」と言って、僕を台所まで連れて行き、僕に初めて、ご飯の炊き方と、包丁の使い方を教えてくれた。

* * *

「…やっぱり、長谷部くんは僕のこと信用しすぎだと思う」

「なにか言ったか？」

「なにも。ていうか、勉強するなら机でやってよ」

「こっちの方が頭に入る」

僕は何にも頭に入りませんけど。とは言わず、人の脚に頭を乗せて参考書を読み耽っている彼のことをなるべく視界に入れないように、大判のファッション雑誌で自分の顔を隠した。

「おまえは何を着ても格好いいぞ」

「…ありがとう。長谷部くんは毎日同じサンダルばかり履き過ぎだよ」

「楽なんだ。いいよな夏は、毎日裸足でいられるから」

外見だけなら王子様みたいな造りをしているくせに、学生服という装備を外した休日の彼は、朝からパチンコ屋に通うおっさんとどっこいどっこのファッションセンスを発揮するので、休みの日くらいと毒づく彼から中学時代のイモジャージを剥ぎ取るのが僕の土日の朝習慣になってしまった。

「長谷部くんも新しい服を買おうよ。僕のお下がりはかり着てないでさ」

「いい。困ってない」

それにろくすっぽ着られないで下げ渡された服がかわいそうだ、と、まるで僕が悪いような言い方をしてくるが、これは中学生になってぐんぐん身長が伸びて、反対に高校生になってなかなか伸びなくなった彼を体格的に追い越してしまった僕へのみみっちい攻撃なのだ。よくされるのもう慣れた。

「あ……ちよつと待て、面白い問題が来た……」

「だから机でやれば……あ、もう……」

彼がぶつぶつと何か呟きながら頭の中で解いている数学問題をちらっと覗き見るが、さすがに習ってもない高校の問題は分からない。

ああいやだ。自分ばかり綺麗な顔しちやつてき。

長谷部くんの言っていた『どうこう』の意味は、彼と出会った年の冬にはもう理解していた。真夜中に目が覚めて、カーテンを少し開けて月明りを入れ、僕のベッドの対角線上にある彼のベッドまで忍び足で近づいて、眉間にシワを寄せた気難しい寝顔を見つめながら、その日に彼が僕に見せた表情や、目の前で着替えたときの肌の色や、光忠と呼ぶときの声を、録画したテレビドラマを観るように頭の中で何度も再生することが癖になって、それが自慰行為と結びつくまでに時間はかからなかった。

僕は長谷部くんのことを、こういう意味で『どうこう』したいんだ。暗くて寒い部屋で、手のひらにまとわりつく体液の熱さだけが際立って、それが余計に虚しかった。

ルームメイトになるとか、セーフワードを決めるとか、DomだとかSubだとか、そういう話は、こうい

うことを覚える歳になってからしてほしかったなと思う。今さらそんなの言ったところでどうしようもないし、仮に長船園長にでも訴えて、じゃあ部屋を分けましようかなんて展開になったら暴れてでも阻止する自分が目に見えた。一人部屋になるだけならいいけれど、そこにタイミンク悪く別のD♯が入園してきたら、長谷部くんはそいつとルームメイトになると言い出すんじゃないだろうか、いもしない恋敵を妄想しては気が狂いそうになる程度には、僕は彼に執着してしまっていた。

「……よし、解けた。で？おまえはいつまでそんな記事読んでるんだ？」

勉強にひと段落つけたのか、参考書をベッドの下に放って僕の膝の上に身を乗り出してきた。自分の邪魔はさせないのに僕の邪魔は平気でしてくる長谷部くんである。そんな記事と言われて、さっきから惰性でめくっていた雑誌のページに目を落とすと、普段は読まずに飛ばしている読み物のページを開いていた。『相手に気があるときのオンナのコの仕草大解剖』とポップな字体で題打っている。

「女性の仕草と異性への好意の因果関係を分析してるのか。さすが高尚な研究だな」

「勘弁してよ……あーあ、この手の記事が少ないから好きだったのに、この雑誌」

「かっこつけるなよ。読みたくて買って来たんだろ？」

「違います。はあ……ほんとくだらない、こういうの。アンケート取って集計しました風に書いてるけど、どうせこういうのってライターが一人で創作して書いてるんだよ」

「え？そんなのか、すごいな」

逆に感心したようだ。長谷部くんは勉強は得意だけど、一から何かを創造することは苦手なのだ。料理も分量と作り方の載っているインスタントの素がないと作れなかったし。その中でも麻婆春雨が一番得意らしい。そりゃそうだフライパンにお湯を沸かして春雨とタレをほぐすだけなんだから。あれは僕の中では料理とは呼ばない。

ここに来たばかりのころは長谷部くんしかお手本がいなかったから、料理というのはこういうもので味の良し悪しはその山ほど種類のある『インスタントの素』によって左右されるのだと本気で思っていた。中学で家庭科の教科書を読んで何かがおかしいと思いつき始め、調理実習で鮭のムニエルを作ったときに確信した。長谷部くんの料理は料理じゃないってことを。そこから料理本を読んで勉強して、施設の食事は脱インスタントした。長谷部くんも分量と作り方を教えておけば次から正確に再現してくれるので、今では僕が教えたものにも限りインスタントの素無しで作ることができる。

施設の子供たちも、最初は新入りの分際で園長の息子にしてもらった（頼んだわけじゃないけれど）僕をやっかんであからさまに避けていたのだが、僕が手伝い始めてから食事のクオリティが上がったことに気付いて、最近では手伝いに来てくれたり、食べたいものをリクエストしようと自分から話しかけてくれるようになった。気が付かずに「なんだか最近、俺の料理の腕が上がった気がする…」などと言っているのは長谷部くんだけだ。どうして僕は大事な初恋をこんな鈍感でデリカシーのない男に捧げてしまったのだろう。

「長谷部くん、そろそろお昼ごはんを作ろうか」

「もうそんな時間か？あ、ほら見ろよこれ、『相手が他のことに夢中になっていると身体にのしかかる、肩に頭を乗せるなどして自分を構えとアピールしてくる』だってさ！これはうごいなあ」

長谷部くんが僕の肩に頭を乗せて僕の雑誌のページを指さしながらそう言う。

「…まだあるよ。相手の知らないことや出来ないことを指摘してイニシアチブを取ろうとしてくる」

「ただの嫌な奴じゃないか」

「何の気なしに泊まりの旅行に誘ってきたり、自分の部屋に呼んだり、自分からベッドに寝っ転がったりと無邪気な態度で相手を振り回すのを好む」

「下心丸出しだな…女も男と変わらないんだな」

「距離を詰めるために、プライベートな家庭事情や携帯のパスコードなどをさらっと教えてくる」

「不用心だな…？心配になる」

ええー、まったく気づいてないみたいだけどー、これってまんま長谷部くんじゃないの？

なんてことはもちろん本人には言うわけがない。一度機嫌を損ねると、激しく怒鳴り散らしたりこそしないものの、小さい仕返しが長期間にわたってネチネチ続けられるからだ。そして、彼の最も分かりやすい地雷が「DomからSub扱われること」なので、まあ必然的に怒らせる犯人は大抵僕で、世間から見た彼は常に温厚な優等生なのだった。

「おまえの言う通り、これが全部ライターの小説なんだとしたら、大した想像力だな」

本当にこういう女が沢山いるのかと思ってしまふ、と、自分がいま僕にべたべたひつついていることは棚上げで感心した声を上げる。彼の柔らかい髪が僕の首筋を刺激する度に、僕が頭の中で夕飯の献立をより複雑により難解にカスタマイズしていることなんて知りもしないのだ。

「……あのさあ、長谷部くん」

ちよつとだけ意地悪したくなって僕は、その低俗な企画のオチに書かれていた「自分に気があるオナナの口向けのテクニク」とやらを彼に実践してやった。なんだ、と顔を上げた彼の身体を抱き締めて、耳たぶに唇が触れるか触れないかの距離で、怒っているように聴こえるよう低い声で囁いた。

「あんまり苛々させないで……乱暴したくなる」

「……」

「……ふ、くく、恥ずかし、なにこの台詞！DV彼氏じゃないか、こんなので落ちる女の子なんて」

「……」

「……えっ？はせべくん？」

名残惜しかったが、冗談を冗談で通せるうちに彼の身体を腕の中から解放してやり、女の子扱いしたことを怒ったかなとその表情を覗き見たら、今まで一度も見たことないくらい真っ赤に頬を上気させていた。そんなばかな、こうかはてきめんだ。

「は、長谷部くんかわい……あだっ」

「う、うるさい！いきなり変なことするな、びっくりする！」

僕の視線から逃れるように顔をそむけた彼を深追いしたら、右手で下顎に思いっきり掌底を決められてしまい、のけぞった隙にベッドから俊敏に逃げられた。

「今日は俺ひとりで作る！おまえはそこで反省している！」

「え……ひとりだって、長谷部くんがひとりで何を作るのさ」

「あ？あ……カレーだ！いいからおまえは来るな！」

「ああカレーなら君でも……って、ああ行っちゃった……」

痛む顎をさすりながら、ベッドから腰を上げ、勉強机の椅子に背筋を伸ばして座り直す。突き飛ばすにしたって、もうちょっと可愛くできなかつたもんだろうか。やっぱりこういうところはオンナの口と同じにはいかないよね、と思う。女の子を口説いたことなんてないけれど。

とりあえず、煮込み料理ならばらくは呼びに来ないだろう。やることはひとつだ。

「可愛かった……今のうちに抜こう」

* * *

この小さな僕らの部屋には、ベッドが二つ、机も二つ、それでほとんどいっぱい。

僕がここに来た日に、僕の荷物に押し出された形で、長谷部くんのベッドと机は入口の壁沿いにびったり張り付いて、入ってきた僕のベッドは彼のベッドとは対角線上の窓際に落ち着いた。長谷部くんは僕のベッドを無駄にでかくて邪魔だと言いながら、部屋にいる時間はほぼソファア代わりに使っていて、僕が遊んで遅く帰って来ると、そこで眠りこけているときもある。

僕の机も、最初は長谷部くんの机の対角線上の壁に接して置いていたのだが、中学に入って以降は位置を移動させ、逆に窓を背にして座るようにした。子供の勉強机にお決まりのダサイ上柵も取っ払ってしまつて、座れば部屋全体を見渡せるようにしていた。

僕は長谷部くんが通っていた市立中学校に通い、そして再来年には長谷部くんが今通っている公立の進学校に入学することになるのだろうと思うけれど、彼が留年でもしてくれない限り、同じ制服を着て同じ校舎で学生生活を送れることはない。だから、部屋で彼が机に向かい勉強するときには、僕も自分の机からその光景を見つめていたいと思つたのだ。まるで同じ教室にいるみたいにして。

ああ、だけど。そんな純粋な恋心は、不純な思春期の性衝動の前には無力だ。高校に入学してからの長谷部くんは僕のベッドにばかり来たがつて、ちつとも自分の机に向かわないし、それならこんな店のカウンターみたいな奇天烈なレイアウトは元に戻せば良かったろうに、こうやって、一人で慰めるときに見つからないようにするにはうつつけだと、気づいてしまつたんだ。

「っ、はあ…、カレーって、何分くらいで呼びに来るだろう…」

玉ねぎを炒めるところからちゃんと言った通りにやっているだろうか？時々びっくりするほど大雑把だから、肉と野菜をいっぺんに放り込んだり、まだ煮えていないうちにルーを投入したりしているかもしれない。さっさと出すもの出して、様子を見に行つてあげないと。

椅子の上に片足を上げて、寛げたズボンの隙間から、まだ弾力を残している性器を取り出した。

今週は毎日こんなことをしている。そのせいか、指でおざなりに扱いても、なかなかいつもみたいに固くならない。小さい子たちが持つてるおもちやのスライムみたいにぶるぶる揺れて、ひよつとしたらこんな滑稽なモノがついているのは世界に自分だけなんじゃないかと自虐的な妄想が広がる。

長谷部くんのおちんちんはどんな形だったっけ？来たばかりのころは、一緒にお風呂に入ったこともあったな。何度か僕の髪を洗ってくれたのを覚えている。いつから一緒に入らなくなったんだろう。

君は今ごろ、僕のお下りのシャツが汚れないように、イトーヨーカドーで1980円で買ったエプロンをつけて、解凍した豚バラブロックを包丁の柄で叩いているんだ。君はいつも、何を作るときでも肉や魚の身に真っ先に触りたがる。

その背中に忍び寄り、エプロンの隙間から手を差し入れて、さっきしたみたいに抱き締めたい。リネンの生地の上から平らな胸板をまさぐって、乳首を摘まんだりしたら怒るだろうか。女じゃねえぞってまた顔に似合わない言葉遣いで怒るんだろうな。

それなら男の子の方を触らせてもらおう。ズボンのファスナーを下ろして、ばんばんに溜め込んで、性器をぎゅっと握ったら、君はシンクに手をつけて足を震えさせながら、猫のように背中をしならせて、は、は、と断続的に息を吐くんだろう。

ゆるゆると勿体付けて触られて、思わず腰が揺れ出して、急に強くこすり上げられたら、ふっ、息を、詰まらせて、先端からたらりと先走りをこぼすんだ。

「はせべっ、くん、こっちも……」

いいところで中断されて、君は不機嫌に後ろを振り向く。その頬に僕は自分のペニスをこすり付ける。感じている長谷部くんを見ていたらすっかり固くなって、先っちょは我慢汁でヌルヌルだ。君は仕方ないなって素っ気なく言って僕の濡れた性器に頬擦りし、ぷっくり膨れた亀頭を小さな唇の中にちよつとずつ焦らしながら飲み込んでくれる。長谷部くんの口の中は、やわらかくてあたたかい。

「はあ、長谷部くん、はせべくんっ……」

竿を扱く手が止まらない。彼の舌の表と裏が、ねとねと僕のを撫せてくる。

もうそれだけの刺激じゃ足りない。イキたい。長谷部くんの形の良い頭を両手で掴み、喉の奥まで当たるように腰を突き出す。驚いて見開かれる目、彼がむせて咳き込む度に喉の奥がばくばくと開閉して、亀頭がちゅうちゅうと吸われる。やばい。きもちいい。イク、出る、飲ませたい、僕の精液を長谷部くんの口の中に全部、全部、ああ、っう——。

一瞬息が詰まって、手の中にどろりと吐き出した。

頭が真っ白になって、それから徐々に、ぽつり、ぽつり、と思考の雲が浮かんでくる。

乱れた呼吸を整えながら、汚れていない方の手で机の引き出しを開けると、準備良く用意されている箱ティッシュとウエットティッシュが現れる。毎回これを見る度に、この机ほんと便利だなんて思うと同時に、オナニー環境を整えてる自分のかつこわるさにげんなりして、気分は一気に下降する。

一人でした後って、どうしてこう慌てて誰かに言い訳したくて堪らなくなるんだろう。身内をオカズにしている後ろめたさから？それならAVでも観ながら抜いたら、こんな賢者通り越した隠者な気分になることもなく、後味すつきり爽快な感じになれるんだらうか。

きし、きし、と木の廊下を歩く足音が近づいてくる。どうやら、長谷部くんお手製のカレーが「みつただ！できた！」できたようだ。なかなかイケなかったから手伝いに行き損ねた。

今日も日課を終えた自身を元通りにズボンに収めて、ウエットティッシュで指先まで丁寧に拭き取り、どうやら手を洗う前に行くわしそうなので、こちらも常備している除菌用アルコールスプレーを念押しで噴きかけてから席を立った。

僕がドアを開けたのが、まさに彼がドアノブを回したタイミングと同時だったので、面食らった長谷部くんはちよつと前のめりになりながら入って来た。

「つとと：なんだよ危ないな。カレー、できたぞ」

「うん、ありがとう。待ちかねて出迎えちゃったよ」

「その割には様子も見に来なかったじゃないか」

「あれ、自分で来るなって言っただけに拗ねてるの？」

「馬鹿言え。俺は他の奴らに声かけてくるから、おまえは先に配膳してくれ」

「オーケー、じゃあ先に行ってるね」

良かった。応急処置で拭き取っただけじゃ気持ち悪くて仕方なかったから、長谷部くんが他の子たちに声をかけている間にしっかり手を洗っておこう。そう思いながら彼の隣を横切ろうとしたとき、すんと彼が一度鼻を吸って、僕の腕を掴んだ。

「待て、おまえ……どこか怪我してないか？」

「へ？してないけど？」

「消毒薬みたいな匂いが……ほら、こっちの手」

そう言っただけは、アルコールスプレーを噴きかけた僕の右手を取り、鼻先を近づけた。

ついさっきまで僕の湿った性器を扱っていた手に、長谷部くんのまっすぐに伸びたまっげが、鼻先が、唇がこんなに近づいて、頭の中で好き勝手に妄想していた彼の淫らな表情がフラッシュバックする。

かあつと顔が熱くなり、自分が今どんな表情をしているのか不安になって、彼の手を強引に振りほどくなり顔をそむけた。光忠？と尋ねる声には純粹な心配しかないのでやるせない。

「大丈夫だよ……ちょっと擦り剥いて、でももう塞がったから」

「本当か？ひどい怪我なら隠すなよ？」

「ありがとう。でも本当にもう大丈夫」

僕の動揺が伝わってしまったのだろう、とても不安そうな顔で見上げる彼に、作り込んだ笑顔で振り向いて、そう言った。

長谷部くんはまだいまいち納得していない目をしていたけれど、お腹が空いたねと僕が言うと、まずは昼食を優先にして、他の部屋の子たちを呼びに向かってくれた。

こりや食事の後にもあれこれ追求されそうだと。いっどこでどうして怪我したとか、見せてみるとか言われそう。食後はしばらく避難していた方がいいな。

僕はズボンのポケットからスマートフォンを取り出して、時間潰しに付き合ってくれそうな友達宛てにラインを送ってから、とりあえずアルコール臭い右手を洗いにトイレへ入った。

* * *

「だーかーらー、そっちの都合でいきなり呼び出すなって言ってるじゃんかよ」

愛児園から川沿いに十五分ほど歩いたところに古いボウリング場があり、その一階はゲームコーナー

になっている。子供の足で気軽に来られる遊び場といったところくらいで、気合入れて遊び倒そうとするなら電車で一時間かけて岡山駅前まで出ないことには何も無い。そんなわけで建物がぼろい割には繁盛している様子で、いつ来てもそこそこ客が入っているし、ゲームの種類も年代物のメダルゲームから最新のものまで揃っている。

「そう言いながら毎回来てくれるのが御手杵だよね」

僕はここに来るとき決まって同じゲームの筐体に座っている。「ダークエスケープ」というボックス型のシューティングゲームで、カーテンで半個室状態になったボックスの中の椅子に座り、目の前の画面から3D映像で飛び出してくる化け物たちを、銃の形を模したコントローラーでひたすら撃ち殺していくのだ。映像に合わせて顔や首筋にエアアが噴きかけられたりして、なかなか凝っている。

「あんた本当にこればっかだな。飽きないのか？」

「少なくともポケゴーよりは飽きてない」

「ああ、そうだ。ライン開いたせいでトゲチックに逃げられたんだからな。弁償しろ」

「このステージ手伝ってくれたら、からあげ棒おごる」

「よっし、セブンのやつな」

「セブン遠い。サークルK」

「俺の家はセブンの方なんだつつうの！」

御手杵は文句を言いながらもカーテンの中に入って僕の隣に座り、備え付けられている3Dゴーグルを装着して、協力プレイ用のコントローラーで画面を撃った。予め何枚か入れておいたコインの枚数が2枚減り、プロンドの女性キャラクターが一瞬表示されて、また元の画面に戻った。

「御手杵は今日も塾？」

「ん？ああ、もうすぐ模試だからな。親父様がうるせーんだよ」

「大変だねえ、病院の跡取り息子は」

「ほんとだぜ。跡取りといっても俺だけ養子じゃん？肩身狭いよ」

御手杵はDomだ。Dom同士は接近すると独特のピリツとした空気を感ずるので、僕がこっちの小学校に転入してからすぐにお互いそうと分かり、仲良くなった。

Domは別のDomが近くにいると、相乗効果で頭が冴え過ぎて、脳が一度に大量の情報を処理しようとする。だから大手企業なんかだとDomの社員をペアで組ませたり、Domの社員だけ集めたチームを作ったりしているらしい。しかし僕らまだ子供の身分にとっては、そこまで脳を酷使するような難問もないから、ただ単純に一緒にいると疲れる存在だ。それこそ岡山駅前のイオンモールで一日中一緒に遊んだときは二人とも情報酔いしてふらふらになりながら帰って来た。

それでも、僕は友達の中では御手杵と一緒にいるのが一番楽だ。彼もおそらくそう思っているだろう。学年が上がれば上がるほど、ユニ持ちの自分とそうでない大多数の人間との間に存在する「ズレ」は、

大きく深くなっている。なんてことない世間話をしているときでさえ、相手が次に口にする言葉はとつとくに僕には分かっているのに、彼らがその言葉を発するまでの間、僕にとっては長すぎると感じるインターバルを待たなければならぬ。まるで毎分置きにコマースヤルの入るテレビ番組のようで、だけどテレビと違って、他のチャンネルに変えるようにして会話の最中に他のことを始めたら怒られるのだ。そんなズレにうんざりして、僕は最低限の人付き合いがほしいかしくないようになっていったが、長谷部くんと御手杵と話すときにはそれが無い。長谷部くんにはよこしまな妄想を抱いてしまうから、結論、御手杵といるときが一番楽なのだ。

「あんた、しょっちゅうゲーセンばかり来てるコミュ障だから、彼女の一人もできないんだぜ」
御手杵が画面から飛び出してきたメイド服姿のゾンビをヘッドショットしてそう言った。

「悪いね、御手杵みたいにモテなくてさ」

「俺のは『医者跡継ぎ』効果さ。見てくれただけで言ったら眼帯付でもあんたのが選り放題だろう」

「その理屈で言ったら、僕なんて施設の貰われ子だよ？女の子にとっては論外なんじゃない？あと眼帯付でもは余計。こう見えて結構気にしてるんだ」

「そいつは失敬。でも、長船姓なら施設育ちでも片目でも関係ないだろ？」

ゾンビを倒しながら洋館の地下へ進むと、途中から研究所ステージに変わる。ちょいちょい差し込まれるムービーの間に、御手杵がカバンから出したペットボトル入りのサイダーを寄越してきた。

「…炭酸抜けてる」

「警沢言うな。お坊ちゃん」

「さっきの、長船姓なら、ってどういう意味？」

「どういう意味も何も…まさか、ウソだろ、あんた、何も知らずに今まで名乗ってたのか？」

「…そんなに驚かれるようなことなら知らないな。とりあえずムービー終わったから画面見てよ」

研究所ステージに進むと敵の見た目が完全に化け物になってしまるのが残念だとも思う。さっきまでいた洋館ステージが一番好きだ。屋敷にいたところによくしていた遊びを思い出す。

「で、なに、長船園長って結構有名人？」

「ここいら一帯がなんで長船町っていうのか知らないのかよ。紀元前の昔からこの辺は日本刀の生産地として有名だったんだ。津々浦々から買い付け客が押し寄せて、刀鍛冶の工房がいくつも建てられた。

それらを束ねていたのが長船一門。『時遡戦（ときさかのいくさ）』って古典の授業でやっただろ？あれに刀剣男士を献上した逸話もある由緒正しい家柄だ。長船愛児園の園長は、その本家のお嬢さんだよ」

もうお嬢さんって歳でもないけどな、と小さい声で付け足した。

「時遡戦って古事記の話だろ。あんなのはただのファンタジーだよ」

「いいじゃん、日本神話。俺は好きだけどなあ。まあ、そういうわけで、ここらじゃ長船一族の権力は今も健在なわけ。瀬戸内市長も、警察署長も、川沿いのゴルフ場、あれのオーナーもみんな長船さんの

血縁者だよ。少なくとも岡山県内で家柄にこだわって結婚相手探すんなら、間違ひなく長船家は候補に挙がる。今はまだみんなガキだから、学校での態度みたいにツンケンしてிரいや怖がって寄ってこないだろうけど、そのうち女子がオンナになったら、うんざりするほど迫ってくるぜ」

「そんなギャルゲの主人公みたいな展開になったら、御手杵にも分けてあげるよ」

「ばーか。俺はもう、親父様が押し付けてくるSubの女で腹いっぱいだよ…」

ちよつと場所変えるか、と、見飽きたゲームクリア後のエンドロールを流し見ていた僕の肩を叩いて、御手杵は塾の参考書が詰まったシオルダーバッグを大儀そうに肩に掛けると、先にカーテンを開けて出て行った。僕は使われずに残った小銭が釣銭口から出てくるのを待って、それを財布にしまってから彼の後を追って出た。どのくらいプレイしていただろう。ゲームコーナーの客の数はまばらになっていた。上の階はまだ盛況なようで、ボウリングのピンが倒れる音が途切れずに聴こえてくる。

僕は自販機で缶コーヒーを買ってからエレベーターで屋上の駐車場へ出て、周囲に誰もいないことを確認して素早く出口の裏に回り、ちよつと自分たちが乗って来たエレベーターの真上に当たる場所、マンションで例えると貯水槽なんか置いてある出っ張りにハシゴで登ると、その場にあぐらをかいて座った。僕がボディバッグからデジカメケースを取り出すと、御手杵がすかさず右手を差し出したので、カメラのふりして隠しているマルポロの箱から一本出して恵んでやった。自分の煙草に火をつけた後で、ライターも回してやる。

ここは僕たちの秘密基地だった。元は僕一人が時々ここでこっそり煙草を吸っていたのを彼に見つけられて、以来、二人の喫煙所になった。

この場所から見えるものは、足下に何台か停まっている車、やたらにデカイ吉井川、その向こうにはひたすら深緑の山々、それでおしまい。なんにもない町。これを吸い始めた理由だって別にない。ただスリルのあるゲームをしたり、ちよつとだけ悪いことをしたり、していかなかったら、欲しい刺激全部の矛先を、たった一人の人間に求めてしまいそうで、僕はそれを恐れているのだ。その人から失望され、嫌われて、また見放されてしまうことを。

「：ねえ、さっきの話だけど」

「ああ、悪かったな連れ出して。俺から振つといて何だが、誰が聞いているか分からねえし、あまり地元
の奴が集まっている場所で長船家の話は」

「御手杵って彼女いるの？」

「そつちかよ！：いねえよ、彼女は。親公認のセフレが三人いる」

「うえ：なにそれ引く」

「珍しい話じゃないぞ。特にウチみたいにならぬから Doi の養子を取った家は、よくやることだ。せつかく安くない金で買ってきた Doi が、そのへんの大した家柄もない Sui に入れあげて、子供でも作られたら困るから、ちよいちよい欲求を解消させるために雇ってんだよ。お手伝いさんみたいなもん？」

「AVじゃん…で、そのエロいお手伝いさんはみんなSubなわけ？」

「そりゃそうだよ。普通にセックスだけしたって禁断症状は治まらない。DomはSub、SubはDomが相手
でなけりゃ、満足感を得られないからな」

「……Subって、そんな仕事もしてるんだ」

それはSubの性質と社会的評価を考えてみれば当たり前の話なのに、僕はその事実にも、仲の良い友達
が自分より先に童貞卒業していたということよりもショックを受けた。

Domがどうだ、Subがどうだという類の話題を、僕は無意識にけれど意図してずっと避けてきたのだ。
前者は両親のことを思い出すから、後者は長谷部くんのことを思い出して、今以上に彼を僕の頭の中で
貶めてしまうことをしたくなかったからだだった。

「……あんたは？どうなんだよ」

「彼女？いないよ」

「それは知ってるよ。最近きついだろう、禁断症状。どうやって解消してる？」

なんならウチで薬出してやるけど、と言いながら、それが代金とでもいうつもりなのか、指で二本目
の煙草を要求された。面倒なのでコンクリートの床（実際は屋根だが）に箱ごと置いてやると、毎度あ
りつと言って笑いながら抜き取っていった。

「禁断症状ねえ…薬がそんなに効くんだったら、右手が折れたら貰いに行くよ」

「うっへ、どんだけ又いてんの？その見た目で毎日シコリまくりとかシユールすぎるだろ。なんだ、俺はてつきり同室だっていうSubのハイ・ユニバースとそういう仲なんだと思ってたよ」

「——なんで長谷部くんを知ってるの？」

瞬間、周囲の空気がひやりと冷たくなるのが分かった。御手杵にもそれは伝わったはずだが、彼は僕の目を観察するようにじっと見つめるだけで、すぐには口を開こうとしなかった。

「……攻撃するなよ。おまえのSubを取ったりしない」

「それならどうして、彼がSubだって知ってる？」

「患者だからだよ。ウチの病院の」

「あ……そうか。薬を貰いに行ってるの、御手杵の病院だったんだ」

「ハイ・ユニバースの医療費は助成金が出るからな。ちよくちよく見かけるよ。ルームメイトなのにそういう話はしないのか？」

「長谷部くんは……Subの自分を嫌ってて、Domになりたいらしいんだ。そんな彼に、僕からユニバースの話題を振ることはしないよ」

近くでDomを観察できるから同室を志願した、と彼は言っていた。僕ならグレアで操られる心配がない、とも。長谷部くんにとってDomの人間は、パートナー候補なんかじゃなく、自分をSub性に縛り付け、意のままに操ることができる、いわば天敵なのだ。

「は？あんたみたいになりたいたいのか？そりゃ無理だぜ。男女の性じゃあるまいし、ユニバーズは手術で性転換できるものじゃない」

「そのくらいは彼も分かってると思う。Dom になりたいっていうのはたぶん、Sub であることを隠したいって意味なんじゃないかな。ユニ持ちは目立つから、ユニ持ちであることを隠して生きるのは難しいけど、それが Dom と Sub どっちなのかは、禁断症状を見せずに生活していれば分からない…とか」

「無理だろ。ユニバーズ同士ならすぐ分かることだ」

「……そうだね。でも、さっきも言ったけど、その話題を僕からするつもりはないよ」

御手杵は、あっそ、とそっけない返事をして先に立ち上がり、コーヒーの空き缶に吸殻を落とした。

夏の空はまだ明るいけれど、そろそろ日が落ちるころだ。彼も僕もよその家に住まわせて貰っている微妙な立場だから、門限こそないにしたって、真夜中まで帰らないというわけにもいかない。

「あ、そうだ、もう一つだけ聞いていい？」

「なんだよ。何度聞いても何もしてねえし、間に合ってたって」

「そこは信じるよ。さっきの、長船園長の話」

ああ、と答えてすぐに彼はさっと周囲を見回して、この場に誰もいないことを確認した。

「長船家がそんなにすごい家柄なら、僕みたいな余所者を養子に入れたりして良かったのかな？随分あっさり手続きされた気がするし、だから大したことじゃないんだと思ってた」

「そう思うだろ。俺も同じことを小六のとき、あんたが転校してきた日に思ったよ。長船家の人間とは家同士の付き合いで何かにつけて顔を合わせてたが、俺と同一年の子供なんていなかったはずだからな。でも、ちよつと調べてみたら簡単なことだった」

「僕が『燭台切』の子供だったからか」

「なんだ、予想ついてるんじゃない。そうだよ。あんた、俺みたいに売り買いされたんじゃない、燭台切家の実子だったんだなあ。ウチの親父様みたいに実の子がいるのに養子に跡を継がせようとする奴もいれば、実の子がユニ持ちで生まれてくれたのに施設に捨てる奴もいる、そして、そんな棚ぼたで降ってきた優秀な遺伝子を取り込もうとする奴もいるってことだ。長船園長はあの通り、孤兒院なんて儲からない事業を一人でやり出す変わり者だから、長船家のためにと考えたんじゃないだろうけど、少なくとも養子縁組があつさり通るだろうことは踏んでいたと思うぜ」

「そんなに『Do』が欲しいのかな。僕なんて、落ちこぼれの奇形なんだけど」

「…奇形？つて、ひよつとして、その右目か？」

「そうみたい。母さんがそう言つて、いつも隠しておくようにつて眼帯をさせたんだ」

「…なあ、ちよつと見せ」

「いやだ」

「早いな！なんだよケチ。友達だろー」

「友達ならデリケートなところに触らないでよ。エッチ」

「あー、めんどくさいやつ。片目くらいどうなってるって驚かぬえよ。そんなこと気にしないで、とつと開き直って長船の名を利用してのし上がる算段でもしろよ。もう中二だ、ジジババ連中に顔を売るならまだ可愛げのあるうちがいいぜ」

そろそろ行こうぜ、と言って、御手杵は僕の空き缶も持って、ハシゴを使わずに飛び降りた。登るには高すぎるが、降りるときは慣れてしまえばこっちの方が早いし、いつもちよつと怖くて面白い。

「この町で名前売ってのし上がって、それで何かいいことあるのかな」
「そうだなあ：『長谷部くん』を守ってやれるとか？」

「なにそれ、どういうこと」

「あんたはいいさ。D_{III}で家柄も良ければ、よっぽど犯罪者にでもならない限りいくらでも身の振りようはある。手詰まりなのは、その逆の状況にいる長谷部くんの方だということだ」

分かるだろう、と念を押しして彼が投げた空き缶は、綺麗に二本とも缶ゴミの箱に入った。

「処方してる薬だって、抑制剤であって治療薬じゃないんだ。他の D_{III} に取られたくないってんなら、せいぜいケアしてやることだな。心も、身体もさ」

* * *

なんだかんだあって、愛児園に戻ってきたときには22時を回っていた。この時間にはいつも小学生の子供たちの部屋は電気が消えていて、園長と僕らの部屋の窓だけ明かりがついているのだが、園長は用事があるとかで朝から留守にしていたし、僕らの部屋も真つ暗だった。

長谷部くんはいつも夜遅くまで勉強をしているのだが、今日は疲れて寝てしまったのだろうか。起きないよう足音に気を付けながら廊下を進み、部屋のドアをそうつと開けて中に入った。

あれ……？

ドアのすぐ横にある長谷部くんのベッドをちらりと見たら、掛け布団がぺたんとならに敷かれたままだった。トイレかどこかに行っているのだろうか。電話もラインも来なかったから、しょっちゅう一人で出かけている僕を今回に限って探しに行ったなんてこともないだろう。

彼が戻って来たら「おまえは何時までほつき歩いているんだ！」とお決まりの小言が始まりそうだから、今のうちに僕も布団に入って寝てしまうことにした。着ていたシャツを脱ぎながら自分のベッドに近付いたとき、微かに聴こえてきた声に、思わずぎくりと足が止まった。

「……んっ……あ、あ……」

長谷部くんの声が、僕のベッドの中から聴こえてくる。

それもとびきり甘く鼻にかかった、妄想の中でだって聴いたことのない声だ。

「……あ、ふう……つ、ん……」

聞き耳を立てれば、布の擦り合わさる音、にち、にち、と何をしているか分かりすぎるほど分かってしまう水音が、彼の声と一緒に聴こえる。嘘だろう。長谷部くんが、あの長谷部くんが、僕のベッドでエッチなことをしているなんて。

喉はからからだったけど、唾を飲んだらその音で気付かれてしまう気がして、唇を舐めたり噛んだりしながら、少しずつ少しずつ枕元へ忍び寄った。

「はあ、はっ……つ、み、つた、だ……」
僕の名前だ。

そのとき、自分の中を一筋の冷たい針が通って行った感覚がした。

「——呼んだ？」

「……っ!? な、なん、いつ」

「……ねえ、いま、僕の名前呼んだよね？」

「呼んでな、い。ちょ……離れてくれ、出てくから」

「いいよ出て行かなくて。続けてよ、長谷部くん」

布団をまくり上げると、慌ててたくし上げたズボンに両手を突っ込んで、その手を出すこともできずにうろたえている長谷部君の身体が、なぜだろう、いつも見ている彼よりも小さく映った。

「あーあ……人の布団でこんなことして……」

赤くのぼせた肩がびくりと震え、悪いことを隠そうとして閉じている太腿もかたかたと小刻みに痙攣している。なんだろう、これは。長谷部くんを見ていると、胸がざわざわと騒ぐ。まるで心臓に植えていた種が芽吹き、凄まじいスピードで弦を伸ばして、全身の皮膚、毛穴という毛穴から突き破って出てきているようだ。そしてそれらは一斉に、彼の肉を目がけて舌なめずりをしている。

そうか。これは、初めて君に会ったときに感じたあの気持ちと同じだ。

「……長谷部くん、謝って？」

他の何よりも、君のことが可愛い。もっと可愛がりたい。自分の手で。

「あ……ああ……ごめん、光忠、ごめんなさい……」

「どうして僕のベッドでしていたの？」

「……………」

「答えられるよね」

「おまえの匂い、好きなんだ……このベッドですると、身体が楽になる気がして、今夜はおまえが出かけたままなかなか帰って来なかったから、今のうちにとって……」

「……身体、つらい？」

こくりと頷き、おずおずと僕を見上げた彼のおびえた瞳と目が合った。

僕は自分もベッドに乗り上げると、長谷部くんのズボンを再び下ろして、彼の性器から邪魔な両手を引き剥がし、いいところで止められてぐったりしているそれをつんと指で弾いた。

「長谷部くんって両手使ってるの？なんか可愛いね」

「や、触るな、ア」

「禁断症状、つらいんですよ？触らなきゃどうにもならないよ？」

それともこうした方がいいのかな。彼の隣に身体を横たえてその身体を左腕で抱き、空いた方の手で彼の性器を愛撫した。そうすると面白いように反応し、僕の鎖骨の上で熱い息を吐きながら、むくむくと僕の手の中で膨らんでいく。やっぱりそうなのか、Doの、僕の匂いだけでこうなっちゃうのか。なんて愛しい生き物なんだろう。一人で自分のを擦っているより、何倍も楽しい。

「いや、だ：やめろ、薬は飲んだから：」

「ちっとも効いてないじゃないか。：ねえ、僕も今日、君がみんなのお昼ごはんを作ってくれていた間、この部屋で同じことをしていたんだよ。気づかなかった？」

「：：：おまえも？こんな風にも？」

「うん。最近ずっと：同じ症状になって苦しいんだ。二人で治療しようよ：」

僕もズボンのジッパーを下ろして、取り出した自分のペニスを彼のそれにびったりくつつけて、一緒に手のひらで擦り上げると、たちまち彼の先っちょが濡れてきた。

「んっ…長谷部くんので指がぬるぬるして、きもちいい…ね…」

長谷部くんは僕に喋られるだけでも感じるようで、耳から首の下まで真っ赤に腫れさせながら、僕の胸に顔を押し付けて必死に声を我慢している。チェリーみたいに赤い耳たぶが見えて、思わず口に含んでべろべろ舐めたら、ひゃあつと高い声で跳ねてイッてしまった。僕の右手とペニスが、長谷部くんの精液でどろどろに濡れていく。

「ふっ……う………」

彼は射精の刺激とその他なんやかんやで頭がいっぱいのようで、嗚咽のように呼吸を乱しながら、僕の胸にずっと額を押し付けている。そうしているだけなら昼間の光景の延長みたいな仕草なのに、肌と肌の間で充満した湿った空気が、僕らの関係をすっかり変えてしまっていた。

「…ね、起きてよ。僕のコレも、最後までしてほしいな」

一人でいく直前だったところから再開された長谷部くんはちょっと触っただけで達してしまっただけ、僕は一度抜いていたせいか、まだ吐き出せそうにない。

長谷部くんの髪を撫でながら、その腰や太腿をまさぐっていると、指先がじっとり湿った割れ目を見つけた。——Subの性器。男のSubはこゝが濡れるって、本当だったんだ。

「長谷部くん……こゝ、使ってもいい？」

「——！」

興奮で自分でも驚くほど声が低くなった。彼はぱつと目を見開き、途端に僕の腕から逃れようと上体をばたばたと暴れさせた。がむしやらに彼の振り上げた腕が、僕の頭を思い切り打ち、鈍い痛みに思わず舌打ちが洩れる。

「……痛いな。なに……？長谷部くんは、僕からお仕置きをされたいの？」

僕が睨みつけて言うと、彼は本能的に身体を硬直させたが、なおもふらふらと視線をさまよわせて、この状況から脱する方法を考えることを諦めていないのは明らかだった。

やっぱり、できそこないの Dom——「Switch」の僕には、眼力だけで Sub を跪かせることなんてできないんだな。僕は胸中でこっそりと溜息を吐いた。

僕は半分が Dom で、半分が Sub、どちらの性質も併せ持つ「Switch」のユニバースだ。最初に気づいたのは中学でも同じクラスになった御手杵で、やたらとしつこく検査を受けると勧めてきたから、一つの検査を受けるたびに検査代に加えてファミレスもおごらせて、タダで一通りの精密検査を受けさせてもらい、93%の確率で Switch のユニバースだと判明した。ほぼ100%ってことだ。

長谷部くんには秘密にしていた。Switch の特徴として、どちらかの性別に偏らなければ欲求のバランスを取れるため禁断症状が出にくく、薬に頼らなくても生活に支障がないケースが多い。重度の Sub である彼にそんな自慢話をしてどうする、というのが一つ。もう一つの理由は、僕は長谷部くんには、僕のことを Dom だと思っていてほしかったから。こっちが、一番の理由だ。

DoⅡになりたがっている彼が求めたのは、安全に観察できるDoⅡのお手本としての僕であって、半分はSidの性質も持っていること、全然安全じゃなくていつでも彼をどうこうしてやりたいと思っっていること、どちらも秘密にしておかなければ、そばにいられないような気がした。逆を言えば、安全なDoⅡだと思いつまませたままにしていられば、いつまでもそばにいてくれるような気もした。

「まあ…今それを、自分で壊しちゃったわけだけどね…」

「…なに？なあ、みつただ、もう離し…」

「ああ、ごめんごめん。こんなときに考え事なんて失礼だったね」

もうこれで嫌われちゃうって思ったら、つい感傷的になっちゃった。我ながら身勝手だな。

なんでもない。いつもの会話のようにそう言って、とろとろに濡れている彼の後孔に指を埋めた。

「ひっ…や、いやだ、みつ…」

「……ごめんね」

青ざめた顔で首を振る彼の悲痛な声を聞いていられなくなって、その身体をシーツの上うつ伏せにして、上から覆い被さる格好で、腰を高く持ち上げた。

「挿れるよ、長谷部くん」

「っ、やめ、やめろ！みつ……ッ、燭台切！！」

「……………！」

セーフワード、か。

「はは…よく覚えてたね。一度も呼ばずにいてくれたのに」

「…おまえが、呼ばせずにいてくれたんだよ」

「そっか、そう…だね。確かに、うん、僕は、『できそこないの Dom』だった…」

ごめんね。頭を冷やしてくるよ。と言って、ズボンのベルトを掛け直し、部屋を出て行くまでの間、長谷部くんは一言も言葉を発さなかった。

* * *

電池の切れそうなスマートフォンの時刻は、すでに0時を表示していた。頭を冷やしてくるなんて言っちゃって、この町でこの時間に居座れる場所なんてどこにもない。長船駅の周りに数軒だけある居酒屋だつて22時で店じまいなのだ。結局僕は、またお決まりのボウリング場へ戻って来ていた。

「うそだろ、開いてる……」

当然ながらとつくに閉店していて、正面の自動ドアも分厚いシャッターで閉ざされていた。もしかしてどこかに屋上まで上がれる非常階段とか無いだろうか、思いつきで建物の裏手に回り、従業員用と思われる裏口のドアノブをとりあえず回してみたら、回って、開いてしまったのだ。まさか普段から開

けっ放しなんてことはないだろうから、今日に限って施錠し忘れたのだろう。中は非常時の誘導灯だけがうっすら光っていて、人のいる気配はない。出口が開いていても警告音が鳴っていないということは、セコムとかアルソックとか、ああいうセキュリティシステムも入っていないはず警備と見た。

捨てる神あれば拾う神あり、って、こういうときに使う言葉なんだろうな。

数時間前に来たばかりのゲームコーナーは、全ての筐体の電源が落とされて、しいんと静まり返っている。エアコンも動いていないから、フロアには生ぬるい空気がこもっているが、あのまま朝まで外を歩き回るのに比べたら、屋内でしかも座れるんだから天国だ。

屋敷を追い出されたときも、似たようなことを考えたなあ。もしかしたら荷造りするだけさせておいて荷物なんて送ってくれなくて、僕はこの岡山の田舎町で放っぼり出されて野宿なんじゃないかって。実際はそんな悪い想像は杞憂で、屋根もベッドもある部屋で最高のルームメイトと暮らせて、学校にも通えるし、どうやら養子にされた家もそこそこの良い家らしい。おかげで、東京に帰りたと思うときはあっても、家に帰りたと思う日はなかった。

僕にはお馴染みの「ダークエスケープ」のボックスに乗り込み、カーテンを閉めて、椅子に腰を下ろした。今日はここで寝て、朝になったら愛児園に戻ろう。電源の入っていない画面には、牙えない僕の顔だけがぼんやり映り込んでいる。そっと右目の眼帯を外すと、きらきら輝く金色の目がこちらを見ていた。母が嫌った、奇形の目玉だ。

「ふふ…画面の中になると、まるで僕がモンスターみたいだ」

Dom「でもない、Subでもない、中途半端な片目の化け物。」

僕は長谷部くんにとって無害な Dom でいられなかったし、思考を奪って快樂だけ与えてあげられるような完璧な Dom にもなれなかった。ならばいっそ、Subとして彼の苦しみを共有し、親友ヅラして彼の隣にいてあげた方が良かったのかもしれない。

「でも、そんなの無理だ…」

僕は君がほしい。君のそばにいと胸が騒いで、たまらないんだ。

おい。

おーい……。

いつ電源が入ったのだろう。キャラクターの音がする。

「おーい、ねぼすけ、そろそろ起きろよ」

「んあ……おは、よう…はせべくん…」

「おはよう。しかしよく眠れるな、こんなところで」

探すのに苦労したぞ、と話す声に、じわじわと意識が浮上し、唐突にぱちんと覚醒した。

「え、え、えっ!?!はせべくん!?!なんで、どうしているの!?!」

ついさつきまで、青ざめた顔して怯えていた長谷部くんが、何食わぬ顔して僕の隣に座っていた。夢だろうかと思ったが、うす暗いゲームコーナーの電源のついてないゲームの座席に座っているなんて、昨夜起こった特殊な状況をわざわざ再現した夢を見ているというのも変だ。すると、これは。

「……言っておくが、夢じゃないぞ。おまえが朝になっても戻ってこないから、行きそうな場所を探していたんだ。あとは、おそろくおまえと同じ順番を辿ってここまで来たんだよ」

「いま…何時?」

僕のスマートフォンは電池切れで完全に沈黙していたし、長谷部くんはきっちり制服に着替えていた。そういえば今日は月曜日だったっけ。

「朝の5時」

「早いね!?!」

「そうでもないさ。ここの開店は10時だろう、遅くとも9時か8時には従業員が来る。つまり——俺とおまえに与えられた時間は3時間ってことだ」

「どういう…こと?」

察しが悪いな、と肩をすくめて、長谷部くんはコントローラーを手に持ち、何もない画面に向かってカチカチと引き金を引いた。

「……おまえ、昔いた場所でも、おもちゃの銃で遊んでいたって言ってたな」

「……うん」

「父親は撃つと何点もらえたんだ？」

「父さんは…イベントバトル。勝てないって決まってるやつ」

「そっか……」

俺もだ。父親はおっかないよな。と言って、長谷部くんは初めて自分の家族の話をした。

長谷部くんの父親は「D」だったが、ユニバーズを持たない幼馴染の女性をパートナーに選んで結婚し、一人の子供を授かった。それが長谷部くんだ。

とても仲の良い幸せな家庭だったそうだが、彼が9歳の誕生日を迎えたころから、父親の様子がおかしくなっていた。どちらかといえば放任に育ててくれていた父親が、家にいるときは片時も彼の傍を離れようとせず、一度着た服を何度も着替えさせ、その度に頬や腹、陰部にキスをする。時には嘔みつかれ、声をあげようとすると打たれたという。

「俺は父の変化を嫌だと思わなかった。何をされても頭がふわふわして、嬉しかった」

母親は夫と息子の行動に気づいていても何も言わずに耐えていた。それで調子に乗ったのか、父親は母親の見ている前でも息子を脱がせ、性的な手つきで撫でまわすようになっていった。

「母は、俺の顔を見るたび般若のような形相で俺を睨んだ。…とても辛そうな顔だった。よく泣いてい

たよ。可哀想だと思わないか。父も母も、愛情を信じて結婚したのに、SEPの俺が生まれたことで全部狂ってしまったんだ」

父親の行動はどんどんエスカレートし、自分の性器を触らせたり、舐めさせたりするようになり、そしてある夜、ついに彼の幼い身体に自らの性器を受け入れさせようと子供部屋の小さなベッドの上で彼の身体にのしかかっていたところを、我慢の限界を迎えていた母親の絶叫によって、止められた。

「もうここにいちやいけないうって思った。二人のこと、好きだったんだ。だから小学校のパソコン使って自分で調べて、俺は自分からあの施設に入った」

「自分から…」

「長船園長に全部喋ったから、手続き的には虐待からの保護ってことになってるんだろ。父が何度か迎えに来たけど、園長が毎回追い返してくれてさ、それで警察呼んだり無理やり連れ戻そうとはしなかったから、きつとそういうことなんだと思ってる。…あの人には申し訳ないけど、こういうことが起こった場合、法律はSEPを保護してくれても、世間は『SEPの方から誘惑した』って考える。だから、母とは別れてしまったかもしれないけど、それ以外は支障なく暮らしていると思うよ」

一時間経ったな、と彼が腕時計のバックライトを点灯させて眩き、銃のコントローラーを持ったまま、くるりと横を向いて僕の方を見た。

「……おまえの右目、そんな風になってたんだな」

そう言われて初めて、僕は眼帯を外したまま寝てしまったことを思い出し、慌てて椅子の上や足元を探したけれど、どこかに落ちてしまったようで見つからなかった。スパアも部屋に戻らないと無い。

「隠すなよ。本当に片時も外さないから、よっぽどドロドロのグツチャグチャなことになってると思っ
てたけど、目の色が違うだけじゃないか。きれいだ…見てると不思議な気持ちになる」

「……口説いてる?」

「おまえ…よくそんな冗談言えるな。俺にあんなことしておいて」

「そっちが普通にしてくるからじゃないか! なんて、どうして僕を追ってきたの」

半袖のワイシャツの襟はびったりと閉じられていて、紺色に斜めストライプの入ったネクタイが彼の胸の上を流れるように下がっている。初めて会ったときの彼は学ランだった。高校の制服に変わっただけで、彼自身は何も変わっていないはずなのに、僕の目を通して見る彼は、日に日に性的な雰囲気を増していく。今だって、その身体にむしゃぶりつきたくなる衝動を目を逸らして堪えている。

「Subは、支配されずにはいられない生き物だ。それって、いったい何のためにヒトの形を取っているんだろうな? ……光忠、おまえはなぜだと思おう?」

「なぜ…って……」

「俺は、モノに生まれたかった。感情があっても、Doiの前では自分のことなんかどうでもよくなって、全部投げ出して滅茶苦茶にしてほしくなる。こんなはしたない身体を、薬で一生誤魔化していくのか?」

優秀な成績も運動能力も、SEFには無意味だ。『頭のいい娼婦』、それが俺たちの行きつく先だよ。こんな生き方しか許されないなら、初めから生まれたくなんてなかった！それなのに……」

長谷部くんは銃をホルダーに戻し、僕を跨いで膝立ちの格好で馬乗りになった。驚いて彼の顔を見上げると、彼は濡れた瞳で僕を見下ろしながら、制服のネクタイをすりと指で解いていた。

「光忠、おまえとは、いいルームメイトでいたかった。それが俺の感情で、おまえを拒んだ俺の気持ちなんだ。…けどさあ、もういままさら、戻れないよな？おまえが俺をどうしたいのか、はっきり分かって俺はもう、それに応えたくてやられたくて気が狂いそうなんだよ！——頼む、俺なんかいらなんて言ってくれ、それができないなら、Subにして、楽にしてくれ……」

ぼろぼろとビー玉のように涙がこぼれ、僕の頬に落ちる。

胸がじくじくと痛み、それでいて、果実のように甘い。こんなにかわいそうで愛おしい生き物は他にいないと思った。この気持ちも、長谷部くんに言わせればDomの性質が思わせていることなのか。

「……長谷部くん。僕は、君が好きだ。出会ったときからずっと君に恋をしている。けど君が、これからもルームメイトとして僕といたって言うなら、それが本当の君の望みなら、僕はDomを捨てるよ」

「……………Subとして生きるつもりか」

「え…知ってたの？僕がSwitchだ(っひん)」

「当たり前だ…おまえが普通のDomだったら、とっくに禁断症状起こして逆レイプしてる」

あまりの言い様に言葉を失った僕に、「重度のSEFなめんな」と訳の分からない捨て台詞を吐いた。なんだかそれで気が抜けてしまって、二人してがちがちに勃起させたまま泣いたり告白したりしている状況のおかしさも手伝って、思わず嘔き出しながら彼の身体をそっと抱き締めたら、ふっと力が抜けていくのが伝わった。

「いいのか…？しんどいぞ、Subは。おまえ、あのDomの同級生に掘られるかもしれないぞ」

「御手杵のこと？うーん…それは勘弁かな…」

「まあ、あと一年の辛抱だ。そしたら、俺は県外の大学へ行くから」

「……………え？」

肩を抱いている指先に力がこもった。けれど彼は気付かずには話を続ける。

「ずっと考えてたんだ。長船園長には本当に世話になったから、将来はあの施設のために援助をしたって。おまえがいれば園長に何かあっても施設が潰されることはないだろうし、俺は県外で金を稼いで、残していく奴らが苦労しないようにしてやりたい」

「残していく…：奴らだつて…：…？」

ようやく僕の声のトーンが下がっていることを訝しんで、僕の顔を窺ってきた彼の首筋にひたりと手で触れ、そのまま彼の白いシャツを力任せに暴いた。制服のボタンが弾け飛んで、暴いた肌の生々しさに僕は、この恋のバッドエンドを見た。

* * *

僕は、なんて馬鹿で、ひとりよがりだったんだろう。

家族も、友達も、恋人も永遠でないというなら、そのどれにも当てはまらない君だけは、僕のそばから離れないものと勝手に、そう勝手に思い込んでいた。

「んむっ…ふ、うえ…っ、ただ…」

「どうしたの…？長谷部くん、もっと美味しそうに舐めてよ」

かつて父親から逃げた彼が、今度は僕から逃げて僕を置いていこうとしている。そう思った瞬間、彼の肌にかじり付いて、抵抗した彼を怒鳴り、睨みつけていた。

不思議な感覚だった。右目がぼっと火のともるように熱くなり、その目で睨みつけた瞬間に、長谷部くんは椅子から降りて後ずさり、ゲーム画面のガラスに背中をぶつけたところで、かくんと力を失って僕の足元に座り込んだ。

母さんに拒絶されて以来、他人の前では眼帯を外さないようにしていたから気が付かなかった。この金色の目が奇形であることに変わりはないのだろうけど、Domの能力の半分は、ちゃんとこっちの目には備わっていたのだ。

長谷部くんは時折救いを求めるように僕の名前を呼びながらも、僕の目に見つめられる度にぶるぶると身体を震わせ、僕に言われた通りに動く。僕の足に縋り付く彼の髪を掴み、膨らんだペニスを取り出して「舐めて」とお願いすると、とろんとした目でグロテスクなそれを見つめて、薄い唇をすぼめて、ちゅうちゅうと吸い付いてくれる。決して上手いといえない舌遣いは僕の欲を満たしてくれた。

「ふふ…けなげだね。さあ、君も下を脱いで、きつきしてくれたみたいに僕の上に乗って」

「みつ…ただ、なんで…」

「早くして？」

「っ、う……」

彼が目の前でズボンを下ろし、目に涙をためながらパンツを脱いで床に落とす。何度も頭の中で妄想した光景だけど、本物のいやらしさは比ではなかった。指先で手招きすると、おずおずと僕を跨いで、椅子の上に膝をつき、身体を支えるために椅子の背もたれに両手をついて、叱られた子犬のような目で僕を見下ろした。

「そんなに不安そうな顔しないで。…ああ、こうしていると、まるで長谷部くんに閉じ込められているみたいだね。嬉しいなあ…」

「おまえは…俺のことが、好きなんじゃなかったのか」

「好きだよ。君が僕を想ってくれているよりも、ずっとね」

背中に手を回すと、緊張しているのだろう、冷たい汗で湿っていた。気の立った動物をなだめるように優しく撫でながら引き寄せて、脇腹から胸元まで、あばらのでこぼこした感触を楽しみながら舌を這わせた。ひ、あ、と楽器のように声をあげる彼の身体は、まるでカスタードを指でなすりつけたようになめらかで甘く、僕の唾液でつやつや濡れて光っていた。

「や、だ。そんなとこ」

「…感じるくせに」

Domに求められたSubは、本能的にDomに快楽を与えられる身体に作り変わっていく。今日まではきつと無意味な飾りでしかなかった彼の乳首は、女みたいにぶくと腫れて、口に含んで転がしたら電気が流れたみたいにびくびく跳ねた。さすがに乳房はないし母乳も出ないけど、あん、あんっ、と甘やかな嬌声を聞きながら嘔んだり吸ったりしているうちに、どんどん頭がショートしていった、この身体とセックスをすることしか考えられなくなっていく。

「ほら、君の太腿、べちゃべちゃだよ。なんでだか、分かる？」

もう椅子の背もたれに前のめりに肘までついて、僕に乳首をいじめられながら呼吸を荒げていた彼の弛緩した太腿は、Subの性器から溢れた愛液でべったり濡れていた。その蜜の出所を指でたどると、待ちかねていたようにひくひくと口を開けて、僕の指先に吸い付いてくる。

「…長谷部くん、もうお喋りしたいことはない？それとも喋れなくなっちゃった？」

ないなら、君を僕の恋人にしちゃうけど。

固いペニスを握って、彼の腰をゆっくり落としながら、待ちかねて先走りを垂らしている先端を柔らかい蕾に擦り付ける。どき、どき、と心臓の高鳴る音に煽られながら、少しずつ彼の中に自分を埋め込もうとしたとき、ぽつっ、と頬に雨が落ちた。

「……はせべくん」

「光忠……やめて、たのむ。おれは男だ。おまえのそれは……恋じゃない……」

「……何を言うかと思えば」

女とか男とか恋とか恋じゃないとか、そんなことを知るより前に君を知ったんだ。

「僕は、長谷部くんしか欲しくない」

僕は彼の腰に両手を回し、ぐしよぐしよに濡れた蕾に、一息に肉棒を突き立てた。

「ひいっ！ひいっ！」

彼はカナリアのような切ない声で鳴いて、がむしゃらに身体を動かして暴れた。腕の中に拘束した彼が身をよじる度に、ぐちゅ、ぐちゅ、と接合部が泡立つ。

「あっ……アア……なにこれ、すごい……」

宇宙にこんなにもちいいことがあったのかあ。目玉がひっくり返って脳みそが焼き切れそう。彼のからだの中は、熱いクリームがとめどなく溢れてくるみたいに僕の粘膜に絡み付いて、腰を振って突き

立てる度にぎゅうぎゅうと押し出そうとしてくるくせ、抜こうとするときつく締まって奥へ奥へと誘い込んでくる。なんだよこれ、こんないやらしい身体、誰にも渡せない。どこへも行かせられない。

「アツ！やだあ…っ、みつた、奥っ、つらい…！」

「え…？奥がすきなのか…ここ…？」

僕の両肩を掴んで後ろへ仰け反った彼の腰を掴み、浅いところまで抜いて一気に奥まで突いてやる。ばんっ、と肉と肉がぶつかり合う音がして、「ああ…っ」と感極まった声を彼があげる。僕はその体勢のまま彼の身体を揺さぶり、一度出したくらいじゃ到底足らずに、彼の皮膚の上をつたう汗を舐め、いやらしく匂い立つ肌にかじり付きながら、何度も固くさせてはすこすこ彼の手力を蹴った。

「もう、もうっ、ア…いや、やあ…！」

「無理だよ…だって長谷部くんのこと、どんどん溢れてくるよ、もっとイキたいんだよね…？」

「ちが、それは、おまえがいっぱい出すから…も、だめ…うごかない、で…い、い…！」

「ん…？なあに？」

「い…い、ごりごりされて、きもち、い…。と…もっとお…」

「もっど…奥いっぱい、ついてほしいの？」

「んっ…おく…疼く、突いて、もっど、おねがい…みつただ…」

「…いい子だね。ごほうびをあげようか」

彼の涙でしょっぱい頬を舐めて、噛み締めてぼろぼろになっていた唇をついばんだ。すると彼は惚けた顔で僕を見つめ、赤く腫れた目元をふわりと綻ばせると、今度は自ら僕の唇に吸い付いてくれた。

口づけの作法も分からずに互いの舌を食べ合つて、窒息するほど夢中になった。キスの気持ち良さに頭が溶けて、下半身が本能だけで求め合い、ひととき彼が僕自身をきつく締め付けた時、彼の一番奥の場所に精液を放つた。

「はあっ……は……は……は……は……気持ちいいね……長谷部くん……」

長谷部くんは、止まらない涙を伝わせたまま柔らかに微笑んで、こくと小さく頷いた。

* * *

眠ってしまった長谷部くんをおんぶして、愛児園への道を歩いた。

もうとつくに夜は明けている時刻だったのに、今日は雨が降るのだろうか、空はいつまでもうす暗いままで、途中誰とも会うことはなかった。

部屋に着いて、僕のベッドに彼を横たえ、僕が汚した身体を綺麗に拭いてやる。彼の肌にはあちこち

に噛み痕や鬱血の痕が痛々しく残っており、それが全て自分のつけたものだと思うと、あんなに射精したばかりだというのに、また腰が重く疼いて、この寝顔を見ながらも抜けそうだと思った。

「…馬鹿だな、長谷部くんは…。どうして、セーフワードを呼ばなかったんだい…?」

濡れて額に貼り付いた煤色の髪を拭ってやると、すっかり疲れ果てたのか、いつも彼が眠るとき眉間に刻んでいる深いシワもつるんと見えなくなっていて、子供のようなあどけない寝顔が、ここに初めて来た日のことを僕に想い起こさせた。

君は、僕とどんな関係を望んでいたのだろう。「今日からおまえのルームメイトになる」そう僕に言ったときの君は、すでに自分がこの施設を出て行く未来を想像していたのかもしれない。長船姓を受けた僕に施設を継がせ、自分はより高い収入を得られる場所で働き、資金繰りを手伝う…その目的の一番の不安は、周囲に sup と知られることだ。同じユニバースでも、Dom だと偽ることができれば、出世の妨げにはならない。そこまで考えて、Dom の特徴を知るために僕を同室に迎え入れたのか。

勝手な人だ。「おまえがいれば施設が潰されることはない」だって？僕がこの施設の管理を継ぐなんて誰が決めたっていうんだ。園長への恩義はもちろんある。けれど、長谷部くんがいらない場所を延々守っていくなんて、そんな割に合わないことを引き受けるほど義理堅くないんだよ。

燭台切の名前を奪われ、父と母から必要とされなくなった僕に新しい名前をくれたのは、園長ではなく長谷部くんだった。戸籍上の名前なんて、本物の名前じゃなければどれでも同じ。自分の役割であり、

その場所にもいいと思わせてくれる名前、それが「長谷部くんの Dom」だったんだ。

もう家を出たころだろうか。僕は充電途中の携帯で御手杵に電話をかけた。

「ああ、おはよう。うん、ごめんごめん、今日はサボり。…あのさ、あとでちよつと進路の相談に乗ってほしいんだけど。うん、うん…まあね、詳しくはまた後で。じゃあね」

長谷部くんが僕をどう思っているかというと、僕が彼を Dom として求める限り、彼は Sub の本能に引きずられて僕のことを求めてしまう。

僕が彼のことをどれだけ求めようと、君はその感情を認めやしないし、その感情がどんなものであれ、Dom から向けられるものは全て喜びに変えてしまう。

ユニバースとは、まるで夜明けの来ない海のようにだ。

「長谷部くん、僕は君のしたいことをさせてあげるよ。だから、君がこの場所を守りたいというのなら、僕も君と一緒にお金を稼いであげる。まあ、あと三年は高校生だけどね」

待っててよ、と囁いて唇に触れたら、その奥に真っ赤な世界が見えた。

僕たちの太陽は沈んでしまって、君は潮が満ちるようにおいしく形を変えていく。

僕だけのユニバース。君がヒトの形を取って生まれてきたわけを、僕が大切に教えてあげる。

END

Sundown and hightide

刀剣乱舞 アンオフィシャルファンブック #5
燭台切光忠×へし切長谷部

「うしろがみ」繪子
ugm.echo@gmail.com
Pixiv:2660047
Twitter:ecosan

印刷：しまや出版様
2017年5月4日発行

この本は個人的に作られたファンブックです。原作のゲーム・アニメ・その他公式とは一切関係がありません。内容に関してはフィクションであり、実在のものとは一切関係がありません。ネットオークション等への出品・無断転載を禁じます。